



TITLE:

雑録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑録. 日本外科宝函 1926, 3(3): 723-733

ISSUE DATE:

1926-05-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/199962>

RIGHT:

三宅教授ヨリ鳥瀉教授へ左ノ如ク通信アリタリ。

拜啓益々御清榮欣喜ノ至ニ存上候、次ニ小生昨九日常市ニ參リ書記長マイエル氏ノ出迎ヲ受ケ會計課長ロルチロア氏ト鼎獨塊外科學會ヲ加入セシムル件ニツキ協議仕候、署名者七名ノ不足ヲ補フ事ヲ得タル提議書ハ小生出發後石山助教授ヨリ、マイエル氏宛ニ發送シ既ニ到着シアリテ議題ノ資格ヲ十分ニ具備シアリ、然ルニ八百餘名ノ會員へ送リタル説明書中佛譯文中誤譯アリシ爲ニ、三ノ人物ハ之ヲ盾ニトリ大ニ不足ヲマイエル氏ニ持込タル者アリ又一方ニ於テマイエル氏ニ提出シタル提議書到着以前ニ一般會員ニ説明書ヲ配布シタルハ何カ爲メニスル處アリテ爲シタルヤノ疑惑ヲ與ヘタリ、之ニ對シ「サイン」ノ都合上本部宛ノ書類發送ノ遲延シタルヲ説明シ諒解ヲ得申候、更ニマイエル氏及四五ノ佛、白兩國外科家ハ第七回即チ今回羅馬ニ開催ノ學會へ直チニ獨塊外科學者ヲ出席セシメントスル日本會員ノ意向ナリト誤解シ居レリ、之ハ全然相違ノ旨ヲ說破シ諒解ヲ得候、結局此際日本代表タル小生ガ本件ヲ總會へ提出スルニ於テハ却テ疑惑惡感ヲ抱懷セシメ紛擾ヲ惹起スルノ虞アルヲ以テマイエル書記長自身ヨリ提案シ最早獨塊醫學者

ヲ加入セシメテモ可ナルベキヲ說カシムル手續ニ協議一決仕候、尙ホ日本會員ヲ増員セシムル件モ同意ヲ得申候間御休神下サレ度候

先ハ是迄ノ經過御通知申述度

勿々敬具

十五、三、十日

在ブラッセル市

三宅

速

鳥瀉教授殿

二白 御序ノ節會員諸君へ宜敷御鶴聲被下度候

三宅教授ヨリ鳥瀉教授へ左ノ如ク第二回ノ通信アリ。

拜啓益々御多祥奉大慶候、次ニ遷生等其後伯林ニ着 Prof. Korte, Borchard, Knusch, F. Krause 等ト會見シ彼ノ件ニツキ獨逸學者ノ意見ヲ徵シタルニ何等ノ制限ナク他國同様ノ權利ヲ附與サレ、且ツ將來ニ於テ斯ノ如キ不快事ヲ再演セザル事ノ下ニ加入ヲ可決サル、事ナラバ入會ヲ辭セズトノ見解ニ有之候、要スルニ學術會合ナルガ故ニ條件ヲ附スルガ如キ事ハ萬々ナカル可ク畢竟會議サヘ可決サル、ナラバ必落着ト見做シテ可ナラント存候、諸テ三月廿五日伯林ヲ發

シ先ヅバーゼルニ行キ Prof. Hottz トノ約束ヲ果ス可ク彼ヲ訪問セシ處、彼ハ不幸維納ニ V. Eiselsberg ヲ訪問中第三回目ノ Augenhypertension wegen Uleus ventriculi ニ罹リ

アイゼルスベルヒヨリ手術ヲ受ケ 治療ニ向ヒツ、アリト

之ガ爲ニ面語スル事不能、バルンノ Prof. de Jhermain

ニ協議ヲ要スルヲ以テバーゼルヨリ電話ニテ會見ノ時刻ヲ約シ翌三月廿七日氏ニ面會シ親シク協議シタルニ千九百

廿三年ノ瑞西國外科學會ノ會場ニテ獨逸外科學會者ヲ國際外科學會ニ加入セシメタキ提議アリテ之ヲ可決セシヲ以テ其後其手續ヲトリツ、アリト、氏ハ獨逸ノ主ナル學者ニ加

入ヲ可決サルニ於テハ入會ノ意アルヤヲ文通シ傍ラ他國學者トモ意見ヲ交換セシニ米、和、フィンランド、スエーデ

ン、ノルウェーゲン、英ノ大部分ハ賛成ニ傾ケリト、氏ノ意見トシテ首尾ヨキ結果ヲ望ムナラバ日本トカ瑞西トカノ

會員少キ國ヨリ提議スルヨリハ米國ノ Mayo ヲシテ提議セ

シムルガ得策ナルヲ說キ氏ニ提議ヲ依頼シ賛同ヲ得タリ依テ余ニモ此ノ說ニ賛成サレタシトノ協議ナリキ、此說ハ大

ニ吾人ノ意ヲ得タルモノニ有之候ニ付之ヲ諾シ申候、會則

議事ハ四月九日ニ開催ノ事ニ相成候、此日ガ關ケ原ニテ吾人ハ大ニ吉左右ヲ祈居候、斯ク迄奮闘ヲ續ケ日ニ増シ有望

ニ傾キツ、アル吾人ノ主張ハ必ズ貫徹サル、義ト確信罷在候、

岩永氏ト同道昨三月廿九日夜當地ニ安着仕候、明日ヨリ觀光旅行團ニ參加四月六日羅馬着之豫定ニ御座候

摺筆ニ臨ミ御祥福ヲ奉祈上候 敬具

三月三十日

鳥潟教授殿

玉案下

二白 御同僚諸君特ニ磯部河村伊藤ノ三君ヘ宜敷願上候

三白 日本會員ヲ増員スルノ件モ本部ノ承諾ヲ得候間御

休神被下度候

三宅教授ヨリ鳥潟教授宛左ノ如ク三度目ノ通信アリタリ

拜啓春和之候御揃益々御多祥奉大慶候次ニ迂生等無異消

光罷在候間慮外御休神仰付ラレ度候

却説去ル六日午後二時當市ニ着直チニ代表會議ヲ開キ候

出席者廿三名有之候常會長 Williams 氏議長席ニツキ代表者

ノ出席ヲ調べ次ニ日、米、瑞西ノ三國ヨリ獨逸外科學者加

入ノ提議アルヲ報告シ諸君ノ意向ヲキキタシト述ブ之ニ對

シ佛ノアルトマン氏ハ獨逸ヲ加入セシムルニ就テハ同意ス

ルモ今日ハ其時期ニ非ズ兩國ガ國際聯盟ニ加入セシ時ヲ以

テ入會セシムルニ若カズト、白、伊兩國代表者之ヲ賛ス、之ニ對シ余ハ政事ト學事トヲ混同スルハ其意ヲ不得宜シク

次回即チ第八回ヨリ無條件一テ入會セシムベシト辯ジタリ

瑞西ノ de Quenin 和蘭ノ Schneewaker 氏大一同意味ノ議論ヲ吐キタルモ會議ハ總テ佛語ニテ辯論サルガ故ヘ佛白伊英ノ意中ニ非ザル議論ハ辯論ノ未ダ終ラザル内ニ威嚇的ニ理非ノ可否ハ扱テ置キ巧辯ヲ以テ葬リ去ルノ有様ニ有之候結局之ヲ可否ニ問タルニ無條件ニテ第八回ヨリ加入セシムルニ賛スルモノ五人(日米瑞西、瑞典、和蘭)國際聯盟ニ加入後直チニ入會セシムルノ動議ニ賛スル者八名(佛、英、白伊、ポーランド、デンマーク其他二國)殘ル九名ハ可否ニ與ラズ棄權致候

總會ニ(去ル四月九日)此件ヲカケ候處代表會議決議ノ如ク大多數ヲ以テ獨逸二國ガ國際聯盟ニ加入後直チニ入會セシムル事ニ議決サレ候

斯ク相成候モ吾人ノ努力ハ決シテ徒勞ナラズ

(1) 兎ニ角條件付ナリトモ獨逸外科家ヲ加入セシムルノ精神ヲ貫徹セシコト

(2) 獨逸學者ニ好感ヲ與ヘタルノ多大ナルコト(去ル四月七八兩日ニ舉行サル、獨逸外科學會第五十回祭典ニ當テ余ヲ Ehrensgast トシテ招待スルコトヲ役員會ニ於テ去ル一月決議シ福岡ノ方ヘ書狀ヲ送り來會スルヤ否ヤヲ電報ニテ返答スベク申シ來リ又伯林ニ着セシ際正式ノ招待狀ヲ會長 Hirtz 氏ヨリ贈ラレ且ツ日本國民會員ノ努力ニ對シ感謝ノ誠意ヲ表シ假令如何ナル結果ヲ來

タスモ日本ノ好意ニ對シ深ク之ヲ德トスル旨申來レルコト

(3) 從テ海外研究員ノ獨逸ニ研學サル、人士ニ對シ好意ヲ表サル、コト疑ヒナカルベキコト

學會ハ七百餘名ノ出席ニテ空前ノ盛況裡ニ昨十日閉會仕候是ヨリクツク會社ノ「アンジユマン」ニ加ハリナポリ地方觀光ノ途ニ上リ歸途三、四大學ヲ見學シ本月末伯林ニ入リソロ／＼歸朝ノ準備ニ着手仕度含意  
擲筆ニ臨ミ御祥福ヲ奉祈上候 敬具  
十五年四月十一日

三宅 述

鳥潟教授殿

御案下

二白 日本ノ學會モ定メシ盛會ヲ極メラレ候哉ト奉遠察候  
吾々ハ三宅教授ノ努力ヲ感謝シテ止マザルモノナリ。

## 第二十七回日本外科學會所感

告 天 子

四月二日午前九時第二十七回日本外科學會總會ガ東大法學部ノ講堂デ開カレタ、朝來快晴デ春光ニ惠マレタ申分ノ無イ學會日和ニ幸セラレ會場ハ多數ノ會員デ埋メラレタノ

ハ斯學ノタメニ誠ニタノモシイモノデアツタ、會場ガバラツク建ノアノオ粗末ナノ一搗テ、加ヘテ周圍ニ響クケタ、マシイ建築用ノ「エンジン」ヤ材料運搬ノ運送車ノヤカマシサデ演者ノ言葉ハ演壇ニ近イ少數者以外ニハ殆ンド聞キ取ルコトガ出來ナカツタ、サナガラ工場ノ中デノ演說ナルニモ拘ラズ眞摯ナル研究報告ガ熱心ナル會員ノ討議ニヨツテ勇マシク續ケラレテ行ツタ、ソレニ會場ガ昨年ヤ一昨年ノ様ニ二ヶ所ニ分レテ居ナカツタ上ニ演題ノ數ガ限ラレテ居テ殆ド豫定時間通りニ進行シテ行ツタツシテユツクリト討論ガ行ハレタノデ會員ニハ非常ニ都合ガヨク且ツ面白ク聽ケタ、今度コソ學會氣分ガ充分ニ味ヘタノハ嬉シイ事デアツタ。

筆者ハ主トシテ學會第一日及び第二日ノ宿題報告ノアツタ日ノ興味ヲ引イタ演題ニ就テノ所感ヲ聊カ述ベテ見タイト思フ。

### △紫外線ノ診斷の應用ニ就テ (佐藤太平氏)

紫外線ヲ治療ノ目的デナク診斷上ニ應用セントスル誠ニ興味深キ研究デアル、著者ノ考案シタ裝置ヲ使ツテ專ラ色ノ區別デ癰痕トカ腫瘍、潰瘍、膿ト云フモノ、性質ヲ鑑別シタリ、丹毒ノ境界、發疹、發光體注射後ノ臟器ノ検査、細菌ノ「コロニー」ナドノ診斷ニ用ヒヨウト云フノデアアル、若シ發光體ヲ注射シテ臟器ヲ検査スルコトナドガ容易ニ行

ハレルナラバ臟器診斷上ドレ丈ケ有益デアルカモ知レナイ、今後益々追及サレテ立派ナ業績ノ發表サレルノヲ囑望スル次第デアアル。

### △感染創洗滌療法ノ病理 (陰山 采氏)

著者ハ清野氏生體色法ヲ應用シテ健康又ハ感染肉芽創並ビニ種々ノ洗滌液ヲ以テセル肉芽創ノ病理ニ就テ論ジ肉芽創ニ現ハル、組織球ハ創傷治愈ニ向ツテ最有要ナモノデアツテ此ノ組織球ノ活力ヲ保タシムル様ナ洗滌液ガヨイト云ハレタ、蓋シ實際臨床上ノ經驗ト一致スル所デ近時歐洲大戰ノ經驗ニ鑑ミテ盛ニ使用サレテ有効ナル温湯洗滌療法ナドモ又合理的デアルト云ヘヨウ。

### △惡性腫瘍ノ一新治療方法ノ研究 (中村復一郎氏)

人體腫瘍及ビ動物移植腫瘍ニ就テ組織免疫ノ存在、宿主及ビ部位ノ異ルニヨル腫瘍生物學上性狀ノ差異、免疫發生ニ要スル使用物質ノ不變ト云フ事ヲ動物實驗ノ成績デ述ベ此原理ニ本ヅイテ人體及ビ動物ニ於テ六例ノ免疫體發生ノ實驗ヲ試ミ人體ニテハ腫瘍細胞ノ變性動物ニテハ腫瘍ノ周圍ヨリ壞死ヲ起セルコトヲ報告サレタ、之レニ對シテ鳥瀉教授ハ理論上腫瘍組織軟化ヲ血清學的ニ企ツルニ補體ヲ沒却スル事ハ出來ナイト云ツテ Ehrlich ノ所謂 Horror autotoxicus ヲ引用サレテ詳シク説明サレタ、先年宮路善久博士ハ淋巴肉腫症ニ對シテ腫瘍抗血清、補體及ビ「アドレナ

リン」混和液ノ腫瘍内注射ニヨリテ腫瘍細胞ノミヲ壊死ニ陥ラシメタ事ヲ日本外科寶函ニ報告サレタ、抗血清ノミヲ以テシテ惡性腫瘍ノ溶解トカ破壊トカラ望ムノハ畢竟失敗セル諸種ノ血清學的療法ノ歴史ヲ繰リ返スニ過ギマイ。

此際ニ川上氏が起立シテチト激昂ノ模様デ烏滸教授ノ説ハ體液免疫上ノ話ニテ細胞免疫デハ補體ハ不要ナリト述ベラレタリ併シコ、デノ問題ハ「健康ナ細胞ガ惡性腫瘍性變化ニカ、ラヌ様ニ免疫ヲ獲得スルカ否カ」ノ問題、即チ「細胞免疫ガ成立スルカ否カ」ノ問題ヲ論ジテ居ルノデハナシニ既ニ人體ニ發生シタ惡性腫瘍性細胞ガ果シテ免疫學的ニ破壊サレ得ルモノデアルカ否カノ問題ヲ論ジテ居ルノデアリマスカラ、細胞免疫云々ノ議論ハ餘程見當ガ違ツテ居ル様ニ思ハレタ。健康ナル細胞ガ免疫學的ニ惡性腫瘍性細胞ヲ破壊シテ行クト申スニシタコロデソノ役目ヲスル細胞ハ喰細胞デナケレバナラヌ。併シ中村氏ノ演説デハソノ様ナ所ニ立チ入りテハ居ラヌノデ、タゞ譯モ無ク惡性腫瘍性細胞ガ免疫物質ノ作用デ周圍カラ壊死ニ陥リタリトタワイモ無イ事ヲ考ヘテ居ルノデアル、其ノ様ナ際ニ細胞免疫ガドウノコウノト言ハルベキ場合デハ無イノデアル。其中ニ世界ヲアツト言ハセル癌腫ノ新治療法ヲ發表スル」トカ何トカ申サレテ非常ニ逆上ノ氣味デアツタセイカモ知レヌガコノ様ニ演説ノ本題カラ離レタ事ヲ聞カサレルノハ迷惑

ナ事デアル。

細胞免疫トイフノハ正常ノ細胞ガ一定ノ病原ノ侵害ニ對シテ正常以上ノ特別ノ抵抗力ヲ示ストイフコトヲ意味スルノデアツテ此ノ場合デモ補體ガ必要ナ役目ヲスルモノデアル。體液ヲ離レテ細胞ハ存在セズ、細胞ヲ除外シテマタ體液ハ存在セズ、體液ト細胞トハ一切ノ生物學的現象ニ於ケル表ト裏トノ如キモノデ本來是レ一如ノモノデアル。平面的ニバカリ學問ヲシ、個々別々ニバカリ舶來ノ知識ヲ生マ嚙リニシテ居ツタデハトモダメデアル。

△外科ニ於ケル血量測定ニ就テ (土井保一氏)

著者ハ臨床上ノ血量測定ヲ目的トシテ算式ヲ案出シタ、此式ハ實際上非常ニ簡單ニ應用出來テ面白イ。

△瀉血後ノ血精量ニ就テ實驗的研究 (井尻又五郎氏)

著者ノ研究ニヨルト一般ニ瀉血後ニハ血糖量ガ増加スルト云フ、妊娠家兔、副腎剔出家兔、内臟神經切斷、肝動靜門脈結紮家兔デハ瀉血後ノ過血糖ガ少クナルト云フ新ラシイ成績ガ發表サレタ。近頃外科領域ニ於テモ血糖ニ關スル種々ノ問題ガ注意サレ漸次新事實ノ發表サレルノハ嬉シイ。

△神經切除ニヨリテ起ル血管ノ變化ニ就テ

(志村國作氏)

神經ト血管トノ關係ガ臨床上盛ニ顧慮セラル、今日興味

ハ面白イ。

△諸種癲癇症ノ外科的療法

(齋藤 眞氏)

著者ハ百二例ノ諸種癲癇症ニ施シタル種々ナル手術成績ニ就テ興味多イ報告ヲ發表サレタ、外傷性癲癇ニ施サレタ色々ノ處置ハ特ニ面白ク感シタ、演説終了後ニ宇野氏ハ眞正癲癇ニ對シテ兩側ニ造窓術ヲ行フ事ノ合理的ナル事及ビ其ノ治驗例ヲ追加シタルニ對シ石山氏ハ一側ニ造窓術ヲ施シテ効果ナカリシモノニ更ニ他側ニ造窓術ヲ施スモ効果ナカリシコトヲ附加シタガ烏潟教授ハ有効無効ハ兎モ角モ『造窓術ヲ施ス』ト云フ立場カラナラバ理論上原則トシテ同時ニ兩側ニ之ヲ施ス可キモノナリト云ハレタガコレハ傾聽シ實行スベキダト感シタ、更ニ石川教授ノ追加モアツタガ要スルニ眞正癲癇ニ對スル治療法ハ其ノ原因ノ不明ナルト同時ニ今日何處ニ於テモ困難ナルモノトサレテ居ル様デアルガ既ニ古ク十九世紀中葉ニ試ミラレタ頸部交感神經切除術ノ如キモ近來再ビヤカマシクナツテ吾々ハ幾多ノ手術例モ見テ居ルガ矢張り効果ハ一時的ノヤウデアツテ今後尙ホ研究ノ餘地ガアル問題デアル。

△腦下垂體腫瘍手術治驗例並ニ其病理組織の所見

(關口蕃樹氏)

前額、硬腦膜外切法ニ據ルハ興味深シ。

△心臟外科ノ實驗的研究 (石山福二郎氏角田搏氏)

アル研究デアル。血管ノ變化ガ血管壁ニ損傷ヲ與ヘル場合例ヘバ血管外壁切除術後ニ惹起セラル、可能性ノアルコトハ考ヘ得ラル、事柄デアル。臨床上健康ナル血管ニ本手術ヲ施シタル後末梢血管ニ變化ヲ生ズルトハ思ハレナイガ自分等ハ特發脫疽ノ如キ既ニ病的ナル血管ニ本手術ヲ施シタル後手術部ハ勿論末梢血管ニモ惡影響アリシ事ヲ經驗シテ居ル。交感神經節ヲ切除シテ血管ニ變化ヲ來スカドウカニ就テハ尙ホ多クノ對照ヲ要スルト思フ、タトヘ多少ノ變化(例ヘバ著者ノ云フガ如ク炎症性)アリトシテモ血流ニ障礙ヲ與フルガ如キ事ハアリ得ナイト思フ。

△外科學上ニ於ケル膽石症黃疸ト出血性素因トニ就テ

(副島鎮雄氏)

疸石手術ノ際ニ往々經驗スル黃疸患者ト出血性素因トノ關係ヲ探求セントシタ研究デアル、著者ハ四十例ノ黃疸患者中七例ノ出血性素因ヲ有スルコトヲ確カメ尙ホ動物實驗ノ結果ヨリ黃疸ト血液凝固トノ關係ヲ見ルニ黃疸ノ強弱ガ出血性素因トナルニハ非ズシテ肝實質ノ變化ガ原因トナルモノナリト結論サレタノハ全ク吾々ノ想像シタ所ニ一致シタ様ニ思フタ。

△犬ニ於ケル肝臟全摘出ノ一方法並ニ肝臟全摘出後ノ黃

疸ニ就テ

(谷口熊雄氏)

門脈曠置ト肝臟全摘出トヲ同時ニ行フノ方法ヲ行ヒタル

平壓開胸術が安全ニ行ハレルコトが最早ヤ議論ノ餘地ガ  
ナクナツテ來タノデ胸部外科ハ日本ニ於テ今後何レ丈ケ急  
速ノ進歩ヲ遂ゲルコトデアロウカ括目スベキモノデア  
本研究ノ如キモ平壓開胸術ノ生ンダ一ツノ產物デア  
者等ハ今回主トシテ心囊ニ關スル研究ヲ發表シタ、心囊手  
術直後ニハ變化ハナイガ遠達的ニハ兩心室及心旁ニ擴張ヲ  
認ムルトノコトデア  
大野博士ハ心囊外科ノ三ツノ臨床  
例ヲ追加サレタガコレハ非常ニ有益デ興味ヲ惹イタ。

#### △氣胸ニ關スル實驗的研究

(宮城順氏角田博氏)

偏側外科的開放性氣胸ニ關シテハ昨年ノ學會デ工藤氏ノ  
實驗的研究ノ結果發表ニ依テ大問題ヲ惹キ起シ多クノ會員  
ニ異常ノ緊張ヲ與ヘタノデアツタガ結局工藤氏ノ詳細ナル  
實驗の基礎ト鳥瀉教授ノ追加セル平壓開胸術ノ臨床例及ビ  
佐藤博士等ノ臨床例ナドデ家兎及ビ人類ニハ過壓裝置ナク  
シテ偏側開放性氣胸ハ安全ナリト云フ印象ヲスツカリ會員  
ニ刻ミコンデシマツタ、犬ハ家兎ト異リ開放性氣胸ニ堪ヘ  
ナイト工藤氏ガ發表シテ居タガ著者等ハ本年此ノ犬ト家兎  
トノ相違ヲ來ス理由ヲ解決シタトテ次ノ如キ事ヲ發表シテ  
居タ。

即チ偏側外科的開放性氣胸ガ家兎ト犬トニヨリ危險度ニ  
差異ヲ生ズルハ Dunbar ノ稱フル縱隔膜ノ空氣通過性ニヨル  
モノデ又家兎ニ於テ右側開放性氣胸ガ右側ノ其レニ比シ危

險度多キ理由ハ家兎ニ中間肋間腔ノ存在スルニヨルト、此  
コマデ論ジテ來タ著者等ハ何故ニ更ニ一步論求ヲ進メテ人  
類ニ於ケル平壓開胸術ノ安全ナル理由ヲ説明シナカッタト  
聊カ聽ク者ニハ物足ラナイ感ジヲ與ヘヌデモナカッタ。ガ  
併シ龍ヲ劃イタアトデ眼睛ヲ點ズルノハマタ來年デモ出來  
ル。

#### △氣胸形成ニ因ル呼吸曲線竝ニX線所見ノ變化ニ就テ

(泉山幸吉氏)

東北大學ノ關口外科カラハ異壓裝置ニ立脚シタ肺臓外科  
ニ關スル多クノ業績ガ發表サレテ吾人ノ意ヲ強ウシテ居ル  
關口教授ハ昨年ノ工藤氏演說後ノ追加ニモ人間ニハ吾々ガ  
見タコトモナイ縱隔竪動搖ト云フ事ヲ盛ニ主張シテ居ラレ  
タ、同教室ノ泉山氏ハ本年ノ研究デ家兎及犬ニ於ケル偏側  
外科的開放性氣胸ノ可能ナルコトヲ認メタガ然シ尙ホ縱隔  
竪動搖ニ就テ論ジ其ノ危險ナルコトヲ強ク主張シタ、家兎  
ト雖モ長時間ノ開放性氣胸ニハ遂ニ堪ヘナイモノデア  
論ヲ結ンダ併シ開腹術デモ、開頭蓋腔術デモ多分同一ノ結  
論ニナリハセヌカト思ハレタ。

#### △胸膜癌腫手術治驗例竝ニ其病理組織の所見

(關口蕃樹氏)

原發性胸膜癌腫患者全剔出手術二例ヲ報告サレタガ其ノ  
術後ノ處置及ビ治癒經過ニ就テハ餘リ述ベラレナカッタノ



ハ甚ダ物足りナカッタ。コンナ面白イ例ガ治癒シタノデア  
ルカラ是非其コノ所ヲ詳シク聞キ度イト思ツタ。

△生存ニ必要ナル肺ノ最小限度ニ關スル臨床的觀察

(石川昇氏、横田秀策氏)

臨床的ノ觀察デアアル、腫瘍ナドデハ約三分ノ一、肺結核  
デハ約十分ノ五乃至七分ノ三ノ健存セル肺デ生存シ得ルト  
云フ事ヲ述ベラレタ。

△肺結核ノ手術的療法ニ就テ

(石川 昇氏)

興味多イ報告デアツタ、人爲的横隔膜麻痺及ビ肋膜外胸  
廓成形術ヲ肺結核ニ對シテ行ツタ本邦ニ於ケル初メテノ臨  
床例デアアル、十二例ニ試ミテ非常ナ好成绩ヲ示シテ居ルノ  
ハタノモシイ、コレハ是非追試シテ見度イト思ツタ。

△胸腔外科手術ニ於ケル人工呼吸裝置 (由茅二五四氏)

昨年來鳥瀉教授ノ教室カラ主張サレタ平壓開胸術ガ其後  
多クノ手術例ニヨリ今日ニ於テハ最早ヤ何等議論ノ餘地ナ  
ク應用セラル、コトヲ高唱シソレハソレデ捨テ置キ急速ニ  
更ニ一步ヲ進メテ今度ハ兩側ノ胸腔ヲ同時ニ開ク際又ハ一  
側肺ガ既ニ摘出セラレタモノニ對シテ更ニ健側ノ胸腔ヲ開  
ク際ニドウスルカノ裝置ヲ考案シ其ノ動物實驗ニヨリテ成  
功セル實例ヲ呼吸曲線ヲ以テ示シタ、即チ此研究完成ニテ  
胸腔ノ手術ハ如何ナル場合デモ此ノ裝置サヘ使ヘバ平壓ノ  
下ニ偏側カラデモ兩側カラデモ或ハ一側肺シカ無イ場合デ

モ可能ダト云フ事ニナツタ。此コニ至ツテ胸腔手術ノ實驗  
的基礎ハ全ク確立サレタ様ナ感ガアル、早ク歐米ニ知ラセ  
タイモノデアアル。

以上ノ六題ガ終了シタ後は等ノ六題ガ一括シテ討論ニ付  
セラレタ、胸腔外科ハ昨年論戰ノ的トナリ宿題外ノ宿題ト  
シテ本年ニ持ち越サレタ丈ケ本年學會ニ於ケル興味ノ中心  
トナツテ居タモノト見エ由茅氏ノ演說ノ頃ニハ會場ハ立錫  
ノ餘地ナキ程デアツタ。先ヅ日下部氏ト角田氏トノ間ニ質  
問應答アリタル後東北ノ關口博士ハ猛然立チテ由茅氏ニ對  
シテ同氏ノ演說中平壓開胸術ノ安全ナル事今日既ニ確定的  
ナリト云ヘルハ何故カトテ大ニ難詰シ且ツ平壓開胸術ニヨ  
ル治驗例ニ就テ質問スレバ由茅氏ハ一時間半ニ亘リテ行ハ  
レタル一手術治驗例ヲ答ヘシモ關口博士ノ雲行キ益々險惡  
トナツタ。此時鳥瀉教授ハ靜カニ立チテ吾人ノ主張ハ吾人  
自ラノ主張ニシテ決シテ他ヲ強ユルノ主張ニ非ズト云ヘバ  
關口博士漸ク座ス。

次デ石川博士ハ西歐ニ於ケル本問題ニ關スル大勢ヲ述べ  
大體ニ於テ平壓開胸術可能ニ左袒シ次ギニ泉山氏ハ自己ノ  
研究ヲ再ビ繰返し説明シ長時間ニ亘ル開放性氣胸ハ必ズ  
危險ナリト云ヘバ角田氏ハ開胸後開放性氣胸ノマ、一晝夜  
ニ亘ルモ尙ホ倒レザル例アリトテ兩者ノ間ニ面白キ討論ノ  
應酬アリ。

次ギニ東大ノ伊東氏ハ自己ノ實驗見地ニ本ヅキ由茅氏ノ如キ裝置ヲ用フル事ノ理想的ナル事ヲ追加シテ大勢ハ關口博士ニ不利トナリシ様ナレバ關口博士ハ立チ上リテ今度ハ角田氏ニ論鋒ヲ向ケ Duval ノ所謂 Locus minoris ニ就テ銳キ論爭ヲ闘ハシ果テハ兩者演壇ニカケ登リ恰モ議會其ノ儘ノ討論振リヲ發揮シタノデ滿堂ノ會員ドヨメキ渡リテ喜ブコト限リナシ、此ノ様ナ場面ハ眞率ナ學會ニハ是非必要ナモノデアル。兩氏トモ來年モマタ相互ニ決シテヒケヲ取ルコト勿レカシ。

議論モ終ツテ會場ハ漸ク靜肅ニ歸ツタ時平壓開胸術ノ大山鳥瀉教授ハ發言ヲ求メ關口教授ノ演說ニ報告セラレタル胸膜癌腫全剔出患者ノ開胸後ノ處置ニ就テ質問セルニ對シ關口教授ハ開胸手術後其ノ缺損部ニハ油紙ヲ覆ヒ放置シ肺ハ收縮セリト答ヘタガ鳥瀉教授ハ是レゴソ眞ニ好適例ニ非ズヤト關口教授ハ自己ノ臨床例ヲ以テ自繩自縛トナリシカノ如ク見受ケラレタリ。此時、機ヲ視ルニ敏ナリシ茂木坐長ノ討論終結宣言ニヨリサシモニ緊張ノ極ニ達シタ討論モ終リヲ告ゲタ。

昨年ノ學會ノ時ニ此問題ノ討論ヲ聞イタ人々ガ本年ノ討論ヲ聞イテ居テ等シク感シタデアロウト思ツタ事ハ討議ガ一層實際ニ近接シテ來テ一層核心ニ觸レテ來タ事デアツタ會員ノ多クハ「平壓開胸術危險ニ非ズ」ト云フ確信ヲ抱クニ

至ツタデアロウト思フ。關口博士ノ主張ハ要スル一本年ハ昨年トハ大イニ立場ヲ變ヘテ來テ『平壓開胸術可能ナラム併シ縱隔竇動搖ト云フ事ハ必ラズ起リ得ル、異壓裝置ハ萬一ニ備フ可キモノダト』云フ様ニ響イテ居タト記憶スル。

筆者ハ多クノ臨床例ヲ見ルト縱隔竇動搖ト云フ様ナ事ハ殆ド顧慮シナイデヨイ様ニ考ヘテ居ル。今日迄餘リ此問題ノ爲メニ獨逸ニカブレテハ居ナカツタタバロウカ、十年過ギナイ中ニ日本中何處デモ恐ラクハ外國デモ平壓開胸術ガ盛ニ行ハレルダロウト思フ、然シナガラスクノ如キ重大ナル事業ノ大成ノ前ニ幾多ノ議論ガ闘ハサレナクテハナルマイ、純粹ニ日本民族ノ頭カラ出タ此ノ劃期的ノ「イデ」ヲ實現サセルタメニナラバ今後尙數年間ニ亘リテ會員ノ間デ劇シキ討論ヲ繼續スベキガ至當デモアロフ。鳥瀉教授モ關口教授モ御互ヒ自己ノ確信スル主張ノ爲メニ論ズルノヲ會員ハ何レ丈ケ敬服シテ聞イタデアロフ、吾々ハ衷心カラ兩教授ノ健在ヲ差ン當リ日本外科學界ノ爲メニ祈ル次第デアル。

#### △宿題、交感神經 (内科的方面、吳 教授)

(外科的方面、伊藤教授)

内科的方面ヲ擔當サレタ吳教授ハ從來ノ研究ニ今度新タニ筋「デイストロフィー」ニ關スル研究ヲ加ヘテ報告サレタ。

此方面ニ對スル今日迄ノ大キナ業績ニハ敬服ノ外ハナイ、今マデ發表サレタ論文ニ對シテモ尙學界ニ於テハ隨分異論ノアルコトヲ耳ニシテ居タノデアルガ、今度發表サレタ筋「デイストロスイー」ノ講演ヲ聞イテ果シテ多クノ聽衆ハ同教授ノ推論ヲ咀嚼シ理解シ得タカドウカヲ疑フノデアル、ト云フノハ筋ノ脊髓神經、交感神經支配ヲ論ジテ其ノ相互間ニハ「コンベンザチオン」ノ存在スルコトヲ高唱シテ居ルニモ拘ラズ何故交感神經缺落ニヨリテ「コンベンザチオン」ガ行ハレズニ筋「デイストロスイー」ガ起ルノデアルカ、筋緊張ダケガ代償サレテ營養上ニハ兩神經ノ作用ガ代償サレヌトイフノモ妙ナ話デアアルマイカ、此ノ處ハ更ニ考慮ヲ要スル様ニ思ハレル。ソレカラ又唯一ツノ臨床例ヲ得タト云ツテ「コレデ我が學說ハ完成サレタリ」ト主張サレタノハチト小供ラシクモ思ハレタ。

十九世紀ノ中葉以來今日マデ多クノ報告ノ中ニ斯克ノ如キ臨床例(筋「デイストロスイー」)ハマダ知ラレナイノデアアル、今後モ多分知ラレヌデアロウ。ソシテ又吾々外科醫ハ實際上グローブナガラ交感神經切除術後ニハ多クハ術前ニ比シテ筋ノ肥ツテ來ルノヲ實見シテ居ル位デアル、吳教授ニハ非常ニ好意ヲ持ツテ居ルケレドモ吳教授ノ結論ヤ論斷ニハドウモ氣ガ乗ラヌノデアツタ。

外科方面ヲ相當サレタ伊藤教授ハ各種疾患ニ對シテ種々

ナル交感神經手術百四十六例ヲ臨牀的ニ經驗セラレ其ノ結果發表ト相待ツテ現今發達シ來レル種々ナル交感神經手術ニ對シ其ノ理論の根據ヲ實驗的事實ニヨツテ一々説明サレ就中近時外科學界ヲ風靡シテ居ル動脈外圍交感神經切除術ノ奏効スル本態ニ對シテハ同教授ハ始メテ之レガ解決ノ鍵ヲ與ヘタ。併シ扉ガ全部開イテ吾々ヲ堂ノ中マデ導カレタトハ思ハヌ、ソノ様ニ一時ニ出來ルモノデハ無イ。

尙ホ同教授ノ「イデー」デ大澤氏ニヨリテ創メテ行ハレタル腹部交感神經節狀索切除術ハ現今ノ交感神經手術中ニテ最優越セル手術ナルコトガ臨床例ノ上カラ實證サレタノデアツタ、實ニ其ノ研究ノ廣汎ナルマタ事實ノ豊富ナル、學界ニ貢獻セル所ハ非常ナモノデ、近來稀ニ見ル立派ナ宿題報告ナリトノ評ヲ各所デ耳ニシタノデアツタ、現今未ダ發達ノ初期ニアル交感神經外科ハ伊藤教授ノ研究ニヨツテ一段ノ進歩ヲ見タト云ヘヨウ、吾々ハ伊藤教授ヲ中心トシテ儼然タル交感神經外科ノ一大「シユレー」ガ京都帝國大學醫學部ニ出來上ツタノヲ見テ感激ト歡喜トニ滿チテ居ルモデアル。

以上今年學會ノ一部分ニ對シテ所感ヲ述ベタノデアルガ眞摯ナル業績ニ向ツテ加ヘタ淺學非才ナル筆者ノ妄評ガ肯綮ヲ得ザル事ハ多謝ノ外ハナイ、唯筆者ノ思ツタマ、ヲ書キ綴ツタ次第デアル。

最後ニ筆者ハ演題ノ事ニ就テ一言シ度イト思フ。

本年ノ外科學會ガ他ノ學會ニ卒先シテ演題ノ制限ヲ斷行シタト云フコトハ一般カラハ可ナリ興味ヲ以テ見ラレ又色々ニ批評サレテ居タ、外科學會自身トシテモ本年ハ之レヲ試験的ニ實施スルト云フノデ會員モ亦非常ノ期待ヲ以テ見テ居タノデアル、果然此期待ハ適中シテ大成功ヲ收メタノデアツタ。

近時一般學會ノ潮流ヲ見ルニ徒ラニ演題ノ數ヲ多クシ、甚シキハ演題ノ多數ナルヲ以テ教室ノ誇リナリト考ヘ一向ニ内容實質ヲ問ハザルノ傾向アルハ學界ノ爲メ甚ダ遺憾ナリト思惟スル次第デアル、學會ハ神聖ナル學術討議ノ壇場デナケレバナラナイ、各教室ヤ實地醫家ノ宣傳機關ト化セラル、ニ至ラバ學術ノ討究ハ何處ニモ求メラレナイノデアル、本年外科學會ハ演題ノ數ヲ六十題ニ制限シ一日二十題デ一題ニ十五分間ヲ與ヘ且追加討論ニハ殆ド無制限ノ時間ヲ與ヘテ十分ノ討究ヲ盡サシメ真ニ『學會』ト云フモノ、本領ト面目ヲ發揮シタノハ實ニ嬉シカツタ、アル學會デハ會場ヲ分ケ其ノ上演說ノ時間ヲ定メラレタ十分間サヘモ與ヘナイデ討論ヤ追加モ切リツメテ居ルト聞イタガ、コレデハ學會本來ノ目的ヲ達スルコトハ出來ナイ、外科學會ノ先年モ又此ノ感ガアツタガ本年ハ隔世ノ感ガアツタ、恐ラクハ他ノ學會モ漸次外科學會ニ見習フデアロウ。吾々ハ日本外

科學會ノ幹部ニ時務ヲ知ルノ俊傑ヲ網羅シテ居ルコトヲ誇トスルモノデアル。(妄評多罪)